

Oncology News

METexon14 スキッピング変異陽性 NSCLC に対するテポチニブの有効性/NEJM

非小細胞肺癌（NSCLC）では、3～4%の患者に発がんドライバー変異である *MET* 遺伝子 exon14 スキッピング変異が認められるという。米国・スローン・ケタリング記念がんセンターの Paul K. Paik 氏らは *MET* exon14 スキッピング変異が確認された進行 NSCLC 患者における非盲検第 II 相試験において、*MET* 阻害薬であるテポチニブにより、約半数の患者で部分奏効が得られ、主な Grade3 以上の副作用は末梢浮腫であったことを明らかにした。NEJM 誌 2020 年 9 月 3 日号掲載の報告。

研究グループは、*MET* exon14 スキッピング変異が確認された進行または転移がある NSCLC 患者を対象に、テポチニブ 500mg/日投与した。

主要評価項目は、9 ヶ月間以上追跡調査した患者における独立評価委員会（IRC）判定による奏効率（ORR）とした。

主な結果は以下のとおり。

- ・2020 年 1 月 1 日時点で、テポチニブ投与例は計 152 例、9 ヶ月以上追跡された患者は 99 例であった。
- ・血液検体または腫瘍組織検体で変異陽性が確認された全体集団（99 例）において、IRC 判定による奏効率は 46%、奏効期間中央値は 11.1 ヶ月であった。
- ・奏効率は、血液検体陽性群（66 例）で 48%、腫瘍組織検体陽性群（60 例）で 50%であった。
- ・両検体でいずれも変異陽性であった患者は 27 例であった。
- ・治験担当医判定による奏効率は 56%であり、前治療にかかわらず同程度の結果が得られた。
- ・Grade3 以上の副作用（治験担当医がテポチニブに関連していると判断した有害事象）は 28%の患者で報告され、主なものは末梢浮腫（7%）であった。
- ・テポチニブの永続的な投与中止に至った有害事象は 11%に認められた。
- ・ベースラインおよび治療中に血液検体を採取した患者において、循環遊離 DNA で測定される分子学的奏効率は 67%であった。

<関連文献>

Paik PK, et al. N Engl J Med. 2020;383:931-943.

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/32469185/>

当コンテンツは、株式会社ケアネットの監修により、がんに関連する重要論文を選別し、それらを簡潔に要約したニュースレターです。当社の見解を述べるものではなく、承認外使用を推奨するものではありません。内容の詳細については元文献・元ニュースを、製品に関する情報は各製品の最新の添付文書をご確認いただきますようお願いいたします。

尚、当コンテンツに掲載されている記事等に係る所有権、著作権その他一切の権利は、ニプロ株式会社、株式会社ケアネット、コンテンツ制作者等の著作権者が保有しています。